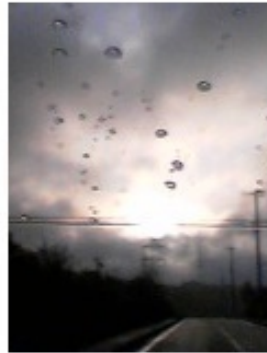


ミチカナハナシ



HALTO

静かな背中

side She

カーテンからこぼれる朝日が
ちょうど枕元に当たっている。
窓側を向いて寝ているあなたに
気づかれぬようにベッドから滑り降りた。

着替えはじめてから靴を履くまで
あなたはずっとベッドの中。
物音に気づいて引き止めてくれるかなと
少しは期待したけどだめだった。

うすうす感じていたの。
もう長くないんじゃないかなって。
いつの間にか静かになった背中
何も言わずにサヨナラをしている。

side He

左手でシーツの上をまさぐると
彼女の温もりはとうに消えていた。
枕の左側の凹みをしばらく見つめた後
朝の生ぬるい湿気を浴びながらカーテンを開けた。

友人のマンションに寝泊りしたとき
初めてそのクセを指摘された。
横を向いて寝ると効果があると言われ
手遅れにならないうちにと実行したのだが。

その頃から気になってはいた。
彼女がどことなく余所余所しくなったと。
もし、話したら信じただろうか
腕枕をしなくなった理由を。

Made in Japan.

長い海外単身赴任から解放され10年振りに日本に帰ってきた。

手土産は向こうで購入した左ハンドルの外国車。

愛着が強く手放すことができず国内に持ち込んだ。

しかし、空港で車を引き取る際、エンジントラブルが発生。

愛車だけは最寄の修理工場でもう一泊することになった。

代わりに用意された代車は国産車。

学生時代乗っていたスポーツカーの進化系だろうか。

だが、あまり感傷に浸っている余裕はなかった。

愛車以外の車を往復で運転しなければいけない。

多少、感覚の違いはあったものの

基本的な操作方法は向こうもこっちも変わらない。

車は運転者の意思どおり滑らかに走り出した。

加速はアクセル、減速はブレーキ、車線変更はウインカー。

それさえ間違えなければ、数十分後には自宅に着くだろう。

右手に挟んだ煙草の灰が落ちそうになっていた。

その時、この車は灰皿がハンドルの左側にあることに気づいた。

愛車は右側にあったので動作がスムーズだったが

左側では、煙草を一端口にくわえるか

右手から左手に持ち変えないといけない。

借り物の車を汚してはいけないと慎重に灰を捨てた。

時間にして数秒の行為がある違和感を覚えさせた。

右を左に...そういえばどことなく視界がおかしい。

風景はさほど変わっていないはずなのだが

そうか！その異変に気づいたその時

前方には爆音をとどろかせた鉄の塊が迫っていた。



コンプレックスの行方

キョージがサングラスの向こうで大きく溜息をついた。
「実は今のお店、いや、仕事を辞めようかなって思ってるんだ」

ヨウコには知り合っただけで、男友達のキョージがいた。
背は高く、足は長く、服のセンスも申し分ない。
正にファッション雑誌から飛び出てきたモデルの様。
その上、仕事は高級住宅街のカリスマ美容師とくれば、
だれもが彼女になって羨ましがりたいと思うもの。
もちろんヨウコもそのひとり。
だが、気がかりなことが二つあった。
一つは仕事のこと、コンプレックスを感じ、悩んでいるということ。
もう一つはいつもサングラスを掛けているということ。
いや、正確に言えば、外さない。
屋外ならまだしも、ショップ、レストラン、映画館ですら掛けている。
芸能人を気取っているようには見えないのだが。
コンプレックスといい、サングラスといい何か深い訳があるのを感じるのだが、
ヨウコは嫌われるのがこわく、キョージの「素顔」に触れられずにいた。

ヨウコはキョージが公休の日、彼が勤める美容院を訪れた。
店での評判を聞き、彼の「素顔」を探り出そうと考えたのだ。
担当になった若い女性スタッフがヨウコが聞き出そうとするまでもなく、
自らキョージのことをしゃべり始めた。
「今日はたまたま休みなんだけど、うちにはTVで取材されたことがあるイケメンがいるの。
ほら、あそこに飾ってあるのがそのときの写真よ」。
そうやって、店内に飾ってある写真を指差した。
それを見てヨウコは絶句した。
(き、きれい...まるで女みたい。どうしてサングラスなんてする必要があるの)
そこに写っていたのはもちろんサングラスなどしていない、初めて見るキョージの「素顔」。
「でもね、最近、すごく悩んでいるみたい。
髪をカットしているとお客さんが鏡に映った彼の姿を見て失神しちゃうの。
居眠りぐらいならいいんだけど、気を失われちゃってはね。
ついこの間も、救急車呼んだのよ。
そのうち指名が減っていっちゃって...
彼には何の責任もないんだけどさあ。
いっそ女に生まれてくればよかったのに」

ヨウコはキョージの「素顔」がなんとなく見えてきた。
カリスマ美容師であるキョージは美貌の持ち主で
お客さんを失神させてしまうほどの美しさ。
それがいつしかコンプレックスとなっていた。
ヨウコの前でサングラスを外さなかったのは、
「素顔」を隠すことによりリラックスしていたかったからかもしれない。
いずれにしろ、あの写真を見ただけでも興奮してしまった自分に、
彼の生の素顔を間近で見れる勇氣はない。
ヨウコは美容院を出た後、キョージと距離を置くことを決意した。

半年後、キョージが美容院を辞めたことを噂で聞いた。
それからさして日をはさまず、突然、彼からメールが送られてきた。

いつまでもコンプレックスで悩んでいてはいけない。
そう思って新しい自分に生まれ変わった。
念願のお店を持ったので一度遊びに来て欲しい。

ヨウコははじめ気乗りしなかったが、好奇心となつかしさがそれを上回り、
仕事帰りに友人と寄ってみることにした。
「ねえヨウコ、元カリスマ美容師がいる店、なんて看板に書いてあったりして」
「まさか。だってもう美容師辞めたんだから。あった、ここだ」
店の看板には「H a l f & H a l f」と書いてあった。
「どういう意味なんだろうね。でもお洒落な感じのお店じゃない」
友人が店の扉を開けると、カウンターの向こうに見覚えのある顔が見えた。
着物が似合う、それもかなりの美人。

あれって、もしかして。胸騒ぎがする。
今度ははっきりと記憶に残っている声がヨウコの耳に届いた。

「あ～ら、どうも～」





勝利の女神

「だめだめ、君は極度の雨女なんだから」。
夕食後、妻が応援に行こうかと声を掛けると、
迷惑そうに夫にたしなめられた。

夫は少年野球チーム、ビクトリーズの監督。
トーナメント方式の大会をこれまで無傷で勝ち進み
いよいよ明日は宿敵フェニックスとの大事な優勝決定戦を控えている。
万一、雨天の場合は試合は行なわれず両チーム優勝というルール。
少年野球といえど、戦わずして優勝では味気ない。
ここまできたからにはスカッと勝って、大喜びしたいところだろう。
「まあ、近所の奥様たちとショッピングでも楽しんでてよ」
そう言って、夫はさっさと寝てしまった。

「極度の雨女か」
夫がそういうのも無理はない。
妻は自他共に認める雨女なのだ。
初デート、結婚式、子供たちの入学式、すべて雨。
新婚旅行ではめったに雨の降らない国を選んだにも拘わらず
史上最大クラスのハリケーンに見舞われた。
応援に行って、いつもどおりに雨に降られては
後々何を言われるかたまったもんじゃない。
妻は渋々、夫の提案を受け入れることにした。

翌日の決勝戦。
試合開始前、主審から決勝戦の簡単なルールの説明があった。
7回まで戦い、得点の多かったチームが優勝。
ただし、5回の時点で7点差がついたり、
雨が降ってきたりした場合はコールドゲームが成立する。
「とりあえず、応援に来てもらわなくて正解だったな」
夫は何とか持ちこたえそうな曇り空を見上げつぶやいた。

ビクトリーズは攻守のバランスが冴え渡り、
5回の裏、2アウトまで6対0と大量リード。
ルール上、あと1点取れば（もしくは雨が降り出しても）
コールドゲームが成立し、念願の初優勝が決まる。

ところが、思いもよらぬアクシデントが発生。

一人のランナーが走塁の際、足を痛め走れなくなってしまったのだ。

選手はギリギリの9人しかおらず、ピンチランナーを出すことができない。

監督を含め選手以外の人では代わりは認められない。

このままでは無効試合で相手の優勝になってしまう。

いつの間にか空にはビクトリーズの運命を

弄ぶかのように雨雲が広がっていた。

夫は満を持してベンチから立ち上がった。

そしてポケットからケータイを取り出し妻にメールを送った。

「大至急、グラウンドに来てくれ！」



美しい双子の姉妹がいた。

幼い頃から両親はもちろん、親戚や近所の人からも可愛がられていた。

「将来は女優さんだね」「いや、モデル向きだよ」

と、ふたりの未来を誰もが楽しみにしていた。

しかし、突然の悲劇が襲い掛かる。小学校に上がる前、両親が交通事故で他界。

幼い2人は、それぞれ親戚に引き取られ、離れ離れで暮らすこととなった。

最後の日、ふたりは一枚の写真を手渡された。

淋しくなったらこれを見て元気を出すようにと。

それは3歳の誕生日にプレゼントを買ってもらったとき父親が撮ってくれたものだ。

同じ人形を抱いて、にっこり微笑んでピースサイン。

姉は右手で、妹は左手で。

姉が選んだものを真似する妹を見て

「何でも、お姉ちゃんと一緒にいいのね」「双子だからかな」と笑い合う両親。

そんな思い出の写真をふたりは一生の宝物として片時も肌身離さず大事にした。

時は流れ、ふたりは立派に成人した。

夢は女優になって、いつか共演すること。それは再会の約束でもあった。

マイペースな性格の姉は小さな劇団の一員になり、コツコツと女優への道を切り拓いていった

。

一方、積極的な妹はあらゆるオーディションを受けるもののすべて落選。

女優への道を断念し、後に平凡なOLとなった。

それをきっかけにふたりの距離は遠ざかり、もはや共演どころか、再会すら夢になってしまった。

数年後、映画界はある話題で揺れた。

有名プロデューサーがたまたま観た劇団公演での演技に惚れ込み、

無名の女優を映画のヒロイン役に抜擢したのだ。

下馬評に反して、映画は興行成績の記録を塗り替える程の大ヒットとなり、

映画界は「あの女優を超える迫真の演技」「10年に一人の逸材」と賞賛。

TVをはじめとしたあらゆるメディアも連日ニューヒロインの活躍を紹介し続けた。

スポットライトを浴びにっこり微笑む女優。

それを複雑な面持ちで見つめる一人の女性。

手には一枚の古びた写真を握っている。

「もしかして、彼女は...」

ヒロイン騒動が一段落した頃、女優にちょっとした事件が起こった。
マネージャーによると連絡がとれず、自宅のマンションにもいないという。
ところが、数日後何事もなかったかのように、ひょっこりと事務所に姿を現した。
連日のハードスケジュールでストレスが溜まり、気分転換のために旅行していたらしい。
復帰後、初めての仕事は家族についての取材。
芸能人にとってプライベートはあまり触れて欲しくない話題だが、
そんなことはおくびにも出さず、いつもと変わらぬ女優の顔で振舞った。

「早くにご両親を亡くされているだけに、双子の妹さんの存在は心強かったですね。
どんな妹さんなんですか」
「もう、何年も逢っていないので—
小さいときは何でも、私の真似をしたがる子でしたね」
「当時のエピソードなどありますか」
「そうそう、3歳の誕生日のときに父に撮ってもらった写真があるんですよ。
二人並んで、同じ人形をもって—」

女優はにっこり微笑み、左手でピースサインをした。



息子とクセとDNA

—あ、またこれだ

仕事から帰ると小学5年生の息子がリビングでTVゲームをしていた。

「健太、ちゃんと宿題やったのか」

「うん、まあ」

「ゲームは1時間以内だぞ」

「いつも、そうしてるって」

普段はあまり気に掛けないが、今日に限って小言が口をついた。このところ残業が続き、疲れからくるイライラがそうさせたのだろうか。

「だからといって、健太に当たることはないでしょ」

いつも息子サイドに付く妻がもっともらしいことを口にしたが、反論すれば戦場と化すことは目に見えている。唯一の楽しみである夕飯の用意をキャンセルされたら元も子もない。はいはい、と心の中でつぶやき、テーブルの上に置いてあった夕刊を広げた。

3杯目のお代わりをどうしようか迷っていると「行ってきま〜す」と健太が出掛けていった。この春から始めた英会話スクールだ。何も小学校から始めなくたって、中学に上がればいやでも必須教科になるだろうに。

「何言ってるの。これからはナショナリズムが求められる時代なのよ」ということらしい、家内曰く。それでも、帰りが10時近くになることもあるため「迎えに行こうか」と親心で聞いてみたら「子供じゃあるまいし」と一丁前の返事をされたことがあった。

それ以来、健太とは冷戦状態（家内とは終戦）が続いていたが、その日は珍しく迎えの要請があった。だが、相手は健太ではなく、塾の近くのコンビニの店長だった。心当たりのない電話に出ると

「お宅の息子さんが万引きをしたので至急来て欲しい」

食後でもたれる腹を抑え、サンダル履きで飛び込んだコンビニのバックヤードには、腕組みをした店長と頭を下げてうなだれている健太の姿があった。どうやら以前取り逃がした万引きの犯人と息子の背格好や雰囲気似ているというのだ。

健太の前に歩み寄り、目の前まで顔を近づけ、しばらく凝視した。

その目には疑いを掛けられた悔しさが滲んでいた。

—違う、僕じゃないよ

—分かってる

健太の頭をくしゃくしゃと撫でた後、店長に向かった。

「もし息子がやったというなら、店内の商品をすべて買い上げてもいいですよ」

その時、店内の方で大きな声が響き渡った。慌てて店内を覗き込むと、健太ぐらいの少年がアルバイト学生に羽交い絞めにされ足をじたばたさせている。

真犯人のお出まじだつた。

家への帰り道、息子が重い口を開いた。

「ねえ、どうして僕じゃないって分かつたの」

「おまえが万引きなんてするわけないしな。それにな」

「それに何」

「クセだよ」

「クセ？僕のもの？」

「おまえが嘘をついているときは鼻がヒクヒク動くんだよ」

「鼻がヒクヒクって...」

健太は思わず鼻をおさえた。

「いいか、ゲームは宿題を済ませてから1時間まで。

約束は守るためにあるんだぞ」

「うん、分かつた」

そう言った息子が珍しく手を握ってきた。

息子との冷戦は終結した。だが、もう一つの戦いは終わっていなかった。

数日後、今度は疑いが我が身に掛けられた。

「ただいま」

「随分遅かつたわねえ、残業だったの？」

「う、うん、まあね」

その時、妻が怪訝そうな顔をした。

「何よ、私臭う？ やあね、鼻なんかヒクヒクさせて」



「困ったときのドットタイっていう話知ってる？」

オフィス近くのオープンカフェで部下の相談事に付き合わされた。

気になる男性の誕生日プレゼントにネクタイを贈りたいが

何がいいかアドバイスしてほしいという。

そこでこんなウンチクを持ち出した。

ドットタイとは別名水玉模様のネクタイのことで

ネクタイ選びに迷ったらドットタイをはめていけば外すことはない。

いわゆる無難でオールマイティーなネクタイだ。

個人的にはストライプのカラーに

このドットタイをはめるスタイルが一番気に入っている。

「これは男側の話しだけどプレゼントにも効果はあると思うよ」

「ドットタイですね」と部下は復唱して微笑んだ。

数日後

再び、同じオープンカフェで部下に呼び出された。

アドバイス通り、ドットタイを贈ったらしいのだが

「クールビズを推奨しているからって言われて…」

要するに意中の男性の職場ではネクタイをはめないということらしい。

「何件も駆け回ったのに…」

部下の頬を一筋の雫が滑り落ちた。

テーブルに落下したそれはきれいなドットを描いた。

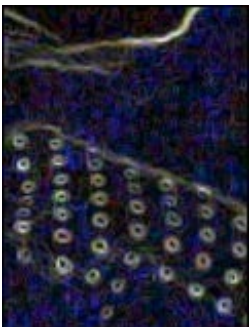
ひとつ、ふたつ、みつつ…

雫はやがて空からも散り始めた。

—まいったなあ

その時初めて

今日はドットタイをはめていたことに気づいた。



築20年の格安優良中古住宅―

それは不動産屋に紹介された一戸建てだった。
場所や間取りはもちろん、立地条件も良好。
近くには様々な施設が充実していて生活にも好都合だ。
だが、何といっても破格ともいえる売値には驚いた。

「どうしてこんなに安いんですか」
「あんまり、言いたくないんですけどね―出るらしいんです」
「出るって、お化けですか」
「しかも子供の」
「子供の？」
「ええ、ずいぶん昔に聞いた話ですけどね」

以前の住居人は父、母、息子の3人家族。
当時5歳の息子を交通事故で亡くし、
両親はその心痛を癒すため田舎に引っ越したらしい。
まだ幼い息子だけ事情が分からずに
その家に現れる（本人にとっては我が家に帰ること
かもしれない）ということなんだろうか。
これまでも近所の人何人が目撃しているという。

「まあ、見える人にしか見えないらしいんですけどね」
20年も様子を見ていないのでそれでもよければと
不動産屋は地図と鍵を渡してくれた。

都心から少し離れた閑静な地にその物件はあった。
築年数相応の旧さは否めないものの
十分に施された手入れの良さに驚いた。
門のフェンス越しから覗いた芝生は青々とし、
とても20年近く誰も住んでいなかったとは思えない。
門の扉を開けて入ろうとしたとき
庭仕事をしている1人の青年を見かけた。
麦藁帽子を被り首にはタオルをぶら下げている。

「見させてもらっていいかな」

「はい、どうぞ」

「君がこの家の管理をしているのかい」

「まあ、そんなとこです」

青年ははにかみながらにっこり微笑んだ。

「玄関の鍵は開いていますので、自由にお入りください」

玄関、リビング、キッチン、寝室、トイレ、バス—

ひとつひとつじっくり時間を掛けてチェックした。

どのスペースも庭同様申し分のない手入れがされている。

契約の意志を固め、それを伝えるため青年を探したが

いつの間にか姿を消していた。

不動産屋に連絡を取ったが心当たりはないという。

もしかして、彼は—

留守を守り、家の手入れに励み、

新しい家主を待ち続けていたのだろうか、

20年という長い歳月を。



「また、遅刻か」

彼女はデートで待たされている。

付き合ってから半年。約束通りに来たことなど一度もない。

ましてや、先に待っていることなどありえない。

前日にメールで確認してもダメ。

理由は分かっている。

きっと家を出るのが遅いのだ。それなのに

「カーナビが故障した」

「交通事故にあった」

「工事で道が渋滞していた」

言い訳はなぜかクルマに関係することばかり。

「今日はどんな言い訳をするんだろ…あ、なんか」

彼女は不安そうに空を見上げた。

「やばいな、また遅れた」

彼は必死にクルマを走らせている。

時間に遅れる理由はデートの準備に凝りすぎてしまうから。

クルマをギリギリまで磨いていたり

ドライブ中のBGMを探していたり

デートスポットをサイトで検索をしていたり

決して怠けているわけではないのだが、どこか詰めが甘い。

今日はクルマを借りてきた。

たまたまDVDで観たアメリカの映画に感化されたせい。

内容はウエストコーストを舞台にしたラブストーリー。

青い空、白い砂浜、ローラースケート、ボズ・スキャッグス。

主人公が粋なクルマで彼女を迎えに行く。

それを演出するにはどうしてもこのタイプのクルマでなきゃだめなんだ。

といって外国の中古車販売をしている友人に頼み込んだ。

これで海岸をドライブすれば、遅刻したことなど許してくれるさ。

風をいつもより身近に感じて走る爽快感。

これがカリフォルニアの青い空の下だったら最高なんだけどな。

そういえば、「ホロ」がこわれているって言ってたな。

何だ「ホロ」って？

そのとき上空では青い空どころか、真っ黒な雲が雷鳴を轟かせた。



ここまで、来ればひとまず安心だ—

あるアパートの一室の玄関口で一人の男が胸を撫で下ろした。
だが、男は部屋の住人ではない。
近くのコンビニで万引きを働いた後、発見した店員に追いかけられ、
命からがらこのアパートに潜伏した、いわば犯罪者だ。

後は警戒が解けるのを待つだけだ。それにしても無用心な住人だな—
幸運にも玄関には鍵が掛かっていなかった。
駆け込んだときは無我夢中だったため気が付かなかったが、
あらためて室内に目を向けると何やら様子がおかしい。
明かりが点いていないためはっきりしないが、荒らされたような形跡がある。
男は音を立てないように室内に入り、一番窓側の部屋を覗いた。
その瞬間、男は目を疑った。仰向けに倒れた女性の姿が見える。
首筋には何やら紐のようなものが巻かれ、天井を見つめたまま微動だにしない。

お、女の死体？

男は今すぐにでもこの部屋を飛び出したい衝動に駆られた。
だが、寸でのところで思い留まった。
万一、見つかってしまえば窃盗罪、住居侵入罪、どころか殺人容疑者になってしまう。
とにかく落ち着いて行動することが先決だ。

そのとき、電話の呼び出し音が静かな部屋に鳴り響いた。男は再び動揺した。
RRRRRRR、RRRRRRR、RRRRRRR、ガチャ
「〇〇です。ただいま外出しております。御用の方は発信音の後にメッセージをどうぞ」

留守番機能が作動し、応答メッセージを流れた。やがて、男の声が聞こえてきた。
「俺だけどさ、おまえ、部屋にケータイ忘れてったろ。
今から持ってってやるよ。あ、そのまま泊まっちゃってもいいだろ。
帰るのめんどくさいし。じゃあな」

おい、おい、ちょっと待てよ—
もう、落ち着いてはいられなかった。
こんなところで鉢合わせになってしまえば、今度こそ逃げ切れない。

コンビニの万引きで出頭すれば、まだやり直しがきくだろう。
男は覚悟を決めて、部屋を後にした。

しばらくして、部屋の住人が帰ってきた。
一人暮らしをしている女性で服飾の専門校に通っている。

「あ、いけない。また鍵掛けるの忘れちゃった。
今朝、課題の作品を持っていくのに、相当慌ててたからな」
そのとき、電話機のディスプレイが点滅しているのに気づき、
ボタンを押して留守番メッセージを聞いた。
「え、これから来るの？ まいったな。部屋の中、片付けなきゃ」

彼女は首にメジャーが絡まったマネキンを引き起こした。



Snow Lady

粉雪が舞う頃、季節はずれのバイトを始めた。
場所は表通りにあるアイスクリームショップ。
そこで知り合った彼女は少し変わっていた。

冬なのに防寒着を身に付けない。
いつも見かけるのは軽装でカジュアルな格好。
好きな食べ物はアイスクリームで
季節を問わず1日必ず3個は食べるという。
でも、彼女がいうにはアイスに限らず
冷たいものなら何でもいいらしい。

彼女に面白い魅力を感じた僕は
バイト先から徒歩10分ほどのところにある
僕のアパートで彼女と暮らし始めた。

街に春の気配が感じられるようになり
日中の気温も少しずつ上昇し始める。
アイスクリームショップに足を運ぶ人の数も
少しずつ増えてきた。

ある朝、彼女がなかなか起きてこなかった。
気分が悪いからバイトを休むという。
アパートを出るとき僕に一言告げた。
「クーラーつけてもいいかな」

まだ3月なのに、もう暑いのかな。

昼シフトのバイトに入って15分ほどが経った頃
店内が真っ暗になった。
朝方から鳴っていた雷がどこかに落ちたようだ。
急に暖かくなったと思ったら今度は雷
春は本当に天候が不安定だ。
男子アルバイトの一人が叫ぶ。
「おいおい、アイスが溶けちゃうぞ」

溶ける...

そういえば一度彼女の手に触れたとき
あまりの冷たさに背筋に寒気を感じたことがあった。

停電ではしゃぐバイト連中を眺めながら
もしかしたら彼女は
もう部屋にいない
いや、もう会えない
なんとなくそんな気がした。



セピア色の約束

都心を離れた閑静な住宅地にそのカフェショップはあった。
ゆったりとした店内には心地よくクラシックが響く。
かつて写真家だったオーナーの前野ジュンの作品が
大きく引き伸ばされて壁にバランスよく飾られている。
その殆どが風景や建造物だが、一枚だけ異彩を放つ一枚の写真がある。
少し人目を避けるようにさりげなく――
初めての客は物珍しそうに前野に尋ねる。
「あの写真はどなたですか」
「娘です」
「あんな小さなお子さんがみえるんですか」
「いえいえ、20年前の写真ですよ」
名刺2枚分ほどのセピア色の世界には
屈託なく微笑む一人の少女が写っていた。

前野には婚姻暦があったが
自らの性同一性障害による異質な交友関係で
幸せな家庭生活を崩壊していた。
「多感な時期を迎えた娘に相応しくない」と
伴りょが下した結論は別々の道を歩むこと。
最後に一枚だけ写真を撮ることを懇願した。
それがあのセピア色の写真だった。
「え～、一枚だけなの、お父さん。また撮ってね、約束だよ」
娘の無邪気で残酷な言葉が今も時折胸を締め付ける。
――何事もなく順調に育ってくれていれば、そろそろ適齢期か。

ある日、前野は一人の常連客から結婚式のとき
写真を撮って欲しいと持ち掛けられた。
形式ばった記念写真ではなく式を挙げる前の様子を
スナップとして残したいというのだ。
前野は自分でよければと快諾した。

結婚式当日、前野は案内された控え室で我が目を疑った。
そこには20年ぶりに見る娘はウェディングドレス姿だった。
――まさか、いや、でも間違いない。間違えるわけがない
前野の存在に気づいた花婿が花嫁に前野を紹介した。

「...本日はおめでとうございます」

「ありがとうございます...」

その時、花嫁が前野の顔を凝視した。前野は萎縮した

「な、何か...」

「何となく、父に似ていたので」

「こら、前野さんに失礼だぞ」

控え室で前野は式前の幸せそうな二人の様子を

真剣な面持ちでシャッターを押し続けた。

係員がスタンバイを告げに来たところで撮影は終了。

前野は再度二人にあいさつをし、控え室を後にした。

極度の緊張から解放されたせいか、急にトイレが近くなった。

用を済ませた後、洗面台の鏡の前でふと足が止まる。

鏡に映った自分の顔を見つめ、大きくため息をついた。

20年前の約束は思いもよらない形で果たすことができた。

本当にあの娘のウェディングドレス姿は綺麗だった。

それよりも不思議そうに前野の顔を見ていたあの表情が

忘れられない1シーンになりそうな気がした。

—無理もないか

前野はポーチから口紅を取り出しそれを唇にあてがった。



婦人服売り場のフロアには
つい先程までのバーゲンの余韻が残っている。
「まるで戦場だったな」と城谷健一が商品を
ダンボールに詰め込む作業をしていると
「台風一過という感じね」と
下着売り場担当の奥寺陽子が話しかけてきた。

「今、いい？」

「ああ、少しなら」

—奥寺陽子

このデパートでこの名前を知らない男子社員はいない。
とにかく絵に描いたようないい女。
容姿は元よりその均整の取れたプロポーションから
社員の間では歩くマネキン人形といわれていた。
そんな女を射止めた健一は羨望の的であった、はずだった。

「最近、どうして、ケータイに出してくれないの？」

「ああ、忙しくてさ」

「でも、メールぐらい見れるでしょ」

「…………」

過去に、健一は陽子と飲みに行き、夜を共にした。
そのときは健気に二人で迎える朝について遅くまで語り合った。
しかし、眠りから覚めたときにはお互いに温度差があった。
一夜だけのスキンシップを訴える男。
適齢期が近づき結婚へのアプローチにしたい女。
両者の思惑の不一致は日に日に憎悪という感情を育み出していた。
やがて、それは最悪のシナリオを紡ぐ結果となった。

「今夜は遅くなる？」

「…………」

「ちょっと、聞いているの！」

「…………」

「ねえ！」陽子が肩に手を掛けてきた。

「うるさい！」

陽子の手を健一が背中越しに振り払った瞬間

美しいオブジェが崩れ落ちる鈍い音が健一の足の裏に響いた。

振り向くと陽子が仰向けに大の字になり天井を見つめていた。

発せられた数秒間の悲鳴は健一が耳にした陽子の最後の「声」となった。

人間って、こんなに簡単に死ぬのか。

健一は何も考えられず、その場にしゃがみこんだ。

故意でないとはいえ、人を殺めてしまったことは事実。

だが、とにかく今は死体をここから搬出することが最優先。

バックヤードを見つけようとフロアを見回したとき

死体と同じようなポーズをとっているマネキン人形が目に映った。

翌朝、デパートは休業日に関わらず熱気を帯びていた。

催事の準備で人をはじめ商品や資材がめまぐるしく移動する。

アルバイトの学生が搬出するマネキンを担ごうとしたとき

「おい、なんかこのマネキン、重くねえ？」

「力ねえなあ、どれどれ、あ、本当だ」

「な、しかも、縦に筋がついてんだよ」

「まるで真っ二つに裂いたみたいだな」

「最近のはパカッと割れるようになってるのかもな」

「まさか、中に人が……」

「冗談よせよ、よっぽどスタイルのいい女じゃなきゃ無理だぞ」

数週間後

健一は同じ売り場の木下知香と社内食堂で昼食をとっていた。

明朗快活、中肉中背、そこそこの容姿。

これぐらいのバランスが俺には一番いいのかも知れない。

ランチを美味しそうに食べる年下の知香を見て健一は思った。

「奥寺さん、どうしちゃったんですか」

「……まだ、行方が分からないみたいだな」

「でも、あの人、あんまり好きじゃなかった」

「そう……どうして」

「なんか、冷たいというか、近寄りがたいというか、まるでマネキンみたいなんだもん」

マネキンという言葉に健一は過剰に反応した。

あれから身の上は何事も起こってはいないが胸騒ぎがやむことはなかった。

「来週もあのバーゲンやるんですよね」

「ああ、おかげさまで好評だったからな」

「商品はストックから出して、ワゴンは通路にあるのを使えばいいか」

知香が独り言のように段取りを始めた。

「そういえば、マネキンはこの前と同じレンタル会社から借りたみたいですよ」

「同じレンタル会社だって……」

「ええ、もうバックヤードに届いていましたよ」

「そのマネキンってどういうポーズだった……」

知香はおもむろに立ち上がりそのポーズをとった。

足は左右に開き、手は45度ぐらいの角度。

「私、最初、奥寺さんかと思っちゃいました」

健一の震えは止まらなかった。

「でも、あんなところで裸で立っているわけじゃないですよね」

そう言って知香は「ごちそうさまでした」と合掌した。



天国から一番近い喫煙所

念願のマンションを購入した。
最上階のベランダから見下ろす絶好のロケーション。
晴れた日は地平線がくっきりと見える。
夜は夜景を楽しみながらビールで乾杯。
無我夢中で働き続けた甲斐があった。

ある日、夜景を見るためベランダに出るとタバコの残り香がした。
まさか泥棒でも入ったのか。
いや、待てよ、この香り...忘れもしない、ショートホープ
10年前に逝去した親父の愛用品だ。

若い頃から親父はヘビースモーカーだったらしい。
だが、俺が生まれてからは家の中ではなく
ベランダの隅っこで吸うようになった。
「母さんがうるさくてな」
いつもそんなことをブツブツ言っていたな。
それでもやめなかったから肺ガンになっちゃたんだろ。
そんなお袋も2年前病気で親父の元へ旅立った。
そっちでは仲良くやってるの？

ベランダにはショートホープの残り香が続いた。
不思議なことに奇妙さは感じなかった。
むしろ帰宅してその香りを嗅ぐことに
何か懐かしさと安心感を覚え始めていた。
また、親父に会えたような...

ふと、ある光景が浮かんできた。
もしかしたら親父はお袋の目を盗んで
このベランダに一服しに来ているのではないか。
天国から一番近い喫煙所に。
もし、俺に見つかったらこう言うんだらうな。
あの頃と同じように。

「母さんがうるさくてな」



レンタルソング

「最後に歌った歌、貸してくれない？」

私は路上でギターの弾き語りをやっている。

演奏の後にいろいろと声を掛けてくれる人はいるが、

そんな突拍子のないことを聞かれたのは初めてだ。

ここ最近、目にするようになった男。

一見、某イケメンプロ野球選手を彷彿させるアジア系外国人のような風貌。

音楽をやっているのか、いつもギターケースを持っている。

「前から聞いてて、すごく良いなって」

「それはありがとう...でも、貸すってというのは」

「ある場所でこの歌を歌いたい」

「この歌を歌う？あなたが」

「そう、僕が。1回だけ」

「...あなた歌手なの？」

そういうわけじゃないけどとって、男は私の横にあぐらをかき、ギターを取り出した。

お世辞にもいいギターではないけど、手入れがすごく行き届いている。

ギターを抱えた男はまるで別人のように見えた。

はにかみながら歌いだした歌は聞いたこともないものだった。

詞も、メロディーも...それよりどこの国の歌なんだろう。

でも、すごく上手い。声も人の心に入り込むようなやさしさを感じる。

貸すぐらいならいいか、悪い人じゃ無さそうだし。

「いいわよ、ほら、歌詞カードのコピーあげる」

「ありがとう...でも」

「どうかしたの」

「読んでくれる？」

「歌詞を？」

「僕、漢字を知らないから、歌詞分からない。歌も意味分からない。ごめんね。

でも、何かとってもいい歌のような気がしたんだ。だれかとても大切な人に贈るような」

彼は私が読んだ歌詞をすべてカタカナで紙に書き写した。

カタカナだらけの歌詞が自分の歌でないようでとても可笑しかった。

「じゃあ、必ず返すから。ありがとう」

「ねえ、あなた生まれは」

その問いかけには答えず、うつむいたままその場を去っていった。

それから数ヵ月後、

路上ライブの帰り支度をしていると、話がしたいと声を掛けてくる男性がいた。

そばには外国人らしき女性が立っている。

いつものファンという感じではないなと思った。

「ネットや口コミでやっとあなたを見つけることができました。

実は義理の兄は僕たちの結婚式であなたの歌を歌ってくれたんです。

とても感動的で、式もすごく盛り上がりました。

それでどうしてもお礼が言いたくて、ずっと探していたんです」

「あ、あのときの。今、お兄さんは」

「兄は強制送還されました。滞在ビザが切れていたんです。

妹にあたる妻は僕と結婚をしてこの町に残ることができたのですが。

兄は僕たちが付き合い出して間もない頃から早く結婚するよう勧めていました。

今、思うと兄はいつかこういう日が来ることを分かっていた、あえて急がせたのではないかなと思うんです」

兄妹の出身国は今もなお治安が安定せず、

生活もままならない状況であることはニュースなどでしばしば採り上げられていた。

ふと、あのとき母国の歌であろう歌をはにかみながら歌ってくれた彼の横顔が思い出された。

「日本を離れるとき兄が言ってました。

あの歌の意味がどうしても知りたいので向こうで日本語の勉強をするそうですよ」

数ヵ月後、彼女の元に1枚のCDが送られて来た。

ダウンロードされていたのはあの兄が流暢な日本語で歌った「最後に歌った歌」。

それに少しいびつな漢字とひらがなで書かれたメッセージを添えて。

遅くなつてごめんね。





ワンダフルモーニング

私にはお気に入りの散歩コースがある。
それは出勤前の密かなお楽しみでもある。

早朝、愛犬のジャックを連れて通る橋がある。
通称「あさひ橋」というらしい。
ちょうど朝陽が顔をのぞかせる頃
辺りを明るく照らし出すことからつけられたという。
一日の始まりを告げる清々しい光は働く前の活力になる。
それだけならどこにもある風景かも知れない。
違うのはいつも同じ時間帯に橋の上ですれ違う、
ジョギングウェア姿の女性。
まるでCMに出てくるモデルのように、
髪を後ろで束ね、音楽を聴きながら、
横を颯爽と駆け抜けてゆく。
この前はニコッと笑いかけてくれた。
ジャックが尻尾を振って応えた。
いつも見かけるので顔を覚えてくれたのだろうか。
あの笑顔にはきっとだれもが好感を持つに違いない。
何とか知り合いになれないものか。

ある朝、散歩に出掛けようするとジャックの姿がない。
庭やガレージを探したがどこにもいない。
仕方なく予定を変更して、ジャック探しに奔走した。
今まで脱走したことなど一度もないのに、
いったい何があったのだろうか。

気が付くとあさひ橋のところまで来ていた。
ジャックがいなくても自然と体が向いてしまったようだ。
すると、いつものように彼女の姿が見えた。
始めは頭が、やがて肩から胸元へ、そして上半身が。
今朝も髪を後ろで束ね、音楽を聴きながら、
橋の向こう側から少しづつ駆け上がってきた。
もう少しで全身が見える。

こんなときジャックには悪いと思いながらも、

気持ちは話しかけることに集中していた。

そうだ、ジャックを見かけなかったか試しに聞いてみよう。

「すみません、うちのジャックを一

今朝の彼女は一人ではなかった。

もう一人、いや、正確には一匹と一緒に——

今度は忠犬にしよう



盛り場のパブで働くハーフ系の女リサ
来日した頃は右も左も分からなかったが
半年も経てば生活にも慣れ悪いことも覚え始める。
いつしか事務所の金庫から売上金を
くすね取るという知恵も身に付けた。
こつこつと貯めたその金はある目的のために
今、正に使われようとしていた。

整形病院の待合室でリサは順番を待っていた。
緊張を紛らわすため女性週刊誌に目をやる。
日常会話程度の日本語を話せるようにはなったが
読み書きは相変わらず苦手だ。
だから週刊誌もただパラパラと写真を眺める程度。
あるページに差し掛かったとき一人の微笑む女性が目に付いた。
着物が似合ういかにも純日本人女性という感じだ。

そうか、外国人のままじゃ目立っちゃう。
日本で暮らすには日本人になるのが一番だわ。

カウンセリングする医師が訝しげな表情を浮かべた。
「この人みたいになりたいのかい、君も変わった人だね」
「いいんです、それで」
「確かに綺麗は綺麗だけど、僕としては乗り気じゃないな」

晴れてリサは自由の身になった。
手術はうまくいき、理想の顔を持つことが出来た。
だが、別人になったことで欲が出たりリサは再び水商売に就く。
やがてリサは若くしてママになり業界誌などにも取り上げられた。
「懐かしの名作からカムバック！ あの女優そっくりのママさん」と
はじめリサは注目される理由が分からなかったが、
まわりからちやほやされることに快感を覚えた。
いつしか新しい生活にも慣れ、
自分が整形したことなどすっかり忘れていた。

数ヶ月経ったある夜、
閉店した店の裏口から出て来たリサを待っていたのは、
黒づくめの4ドアセダンだった。
中年の男が車から降りてきて穏やかな声で言った。

「新宿署の元崎です。署までご同行願えますか」

煌びやかな世界から一転して殺風景な密室。
目の前には無機質な事務机と年老いた刑事。
リサはその落差にため息をついた。

「私がやりました...でも、どうして、私が怪しいと思ったの」

「顔を変えて他人になりすまし、犯罪から逃れるっていう

外国人が増えててね。でも、モデルが問題だったな」

「モデルって、整形の」

「そう、何も故人にならなくてもよかったんじゃないのかな」

「コジンって...」

「やっぱり知らなかったんだ。週刊誌に載っていた写真は

昭和の頃の女優さんだったんだよ」

「ショウワ...」

「今の君の顔は当時の彼女にそっくりなんだ」

「じゃあ、ワタシ亡くなった人になっちゃったの」

「店の人やお客さんの中には違和感を感じていた人もいたらしいよ」

「でも、それだけじゃ」

「たまたま似ていた、それともそっくりさんとでも言いたいのかな」

元崎は両肘を机の上に置き、リサの目の前で掌を組み合わせた。

「ある雑誌社から昭和の女優の特集をやりたいので、

写真を載せてもいいかという話があったときは少し迷ったんだ。

何せ彼女は女優といってもさほど売れていたわけじゃない。

それにあまりいい死に方をしていない」

「どういうこと？」

「彼女はすごく悩んでいた。

このまま女優という職業を続けていくべきかどうかを。

結局、それが解消されぬまま女優の道どころか、

自らの命を絶つ選択をしたんだ」

「そんな...でも、刑事さん、どうしてそんなに詳しいの？」

元崎は取調べを終え、屋外の喫煙所で一服した。
夜空の星に向かって紫煙を吐き出しながら呟いた。
それは若き日の思い出に問いかけるかのように。

まさか、また逢えるとはな、君に



Shower

「よかったら、使う？」

僕はコンビニのゴミ置き場の横で、
雨を拭っていた彼女に傘を差し出した。
それが二人のきっかけだった。

だれかと付き合いたかったわけでもなく、
ドライブに誘いたかったわけでもなく。
ただ、なんとなく僕はその日から、
彼女を車で迎えに行くようになった。

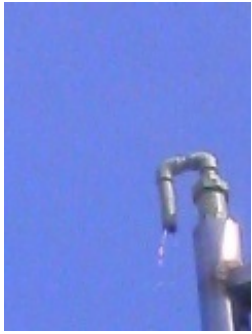
「最近の雨は読めないわね」
折りたたみ傘が嫌いな彼女は、
雨が降っているときしか傘を持たない。
だから色々なところからケータイやメールが僕を呼んだ。
学校、駅、デパート、彼女のバイト先、カラオケハウス、
それといつものコンビニ。

予想最高気温が30℃前後になり出した頃、
夕立の回数も以前ほどではなくなった。
必然と彼女を迎えに行くことも少なくなった。
僕はその頃から人差し指にストラップを掛け、
ケータイをぐるぐる廻すクセがついた。

「あなたに返すものがあるの」
初めて迎え以外の用事で彼女と待ち合わせをした。
場所はいつものコンビニの駐車スペース。
彼女は車に乗るや否や「じゃあ」とだけ僕に告げた。

突然、大粒の雨がフロントガラスを叩き始めた。
彼女はドアを開き、どしゃ降りの雨の中を歩き出した。
助手席のシートとドアの間には、
きれいに畳まれた僕の傘が置いてあった。

次の季節の穏やかさを僕は少しだけ呪った。



ココナッツ・キューピッド

星川は郊外にある喫茶店で淋しいやもめ暮らしを送る中年。
女気ひとつない息子に「いったい孫の顔はいつ見れるやら」という
老母の心配をよそに今日も趣味のカメラで外の景色を眺めている。

「すみません、貼紙見たんですけど」
数日前、写真教室に通うため、その間の店番をしてもらうパート募集の貼紙をした。
その第一号がようやく現れたらしい。
応募してきたのはモデルのような美貌をした中年女性。
一目惚れしてしまった星川は、当初週1日の予定を週5日で強引に頼み込んだ。
一瞬、戸惑った彼女だったが「分かりました」と快諾し店を出た。
星川は彼女から聞いた名前と電話番号を少し興奮気味にケータイに登録した。

—紺野 秋子か、でも、あの顔、どこかで見た覚えが...

秋子が店に慣れた頃、星川は写真教室でのモデルを頼んだ。
純粹に彼女を撮りたいという気持ちからだが、仲間への自慢もしたかったのだ。
撮影日当日、たくさんのカメラの前で秋子は臆することなく振舞った。
その姿は本物のモデルのように美しいものだった。
星川はときめきのようなためいきのような興奮をファインダー越しに抑えていた。

—この表情は撮られる快感を知っている顔だ

しかし、このモデル撮影がとんだハプニングを呼んだ。
それを境に秋子が店に来なくなってしまったのだ。

ある日、若い女性が店にやって来て写真週刊誌を星川の前に叩き付けた。
そこにはあの撮影会の際の秋子のスナップが。
どうやら教室の不届き者が無断で投稿し、それが掲載されてしまったらしい。
それを知った秋子はショックで家から一歩も出なくなってしまったという。
「あんたがあんなことさせるから」
「いや、決してそんなつもりじゃ」
「おっさんのくせに、お母さんが誰だか分からなかったの」
—お母さん？ そうだ、思い出した。元グラビアアイドルの秋めぐみだ。
たしか、若くしてシングルマザーになり芸能界を引退したというのは聞いたことがある。
言われてみれば、この娘も彼女の若い頃に良く似ている。
しかし、彼女がなぜ今、この町に。
「お母さんが生まれた町なの」

娘が代わって母親の半生の一片を語ってくれた。
芸能界を去った後、住所を変え、名前さえも変え、
母子二人で人目を避けるように生きてきたこと。
フォトグラファーを目指す娘を専門学校に行かせるため一日中働いてくれたこと。

ようやく数年前この町に戻り、美味しい珈琲を淹れてくれる喫茶店とカメラ好きで素敵なマスターと出会えたこと。

「お母さん、すごく嬉しそうだった」

星川はやり場のない焦燥感に包まれた。

「お母さんに謝罪させてくれないかな」

「へえ、そんなに逢いたいんだ」

数日後、娘からメールが送られてきた。

娘が指定した待合せ場所は撮影スタジオだった。

中に入ると端の方でソファに座っていた秋子が腰を上げた。

「専門学校で課題で記念写真を撮るといふのがあるんだけど」

と娘が抱えている二つの手提げ袋にはウェディングドレスとタキシードが入っていた。

—なるほど、写真の落とし前は写真でということか

「すみません」と頭を下げた秋子に星川は「こちらこそ」と苦笑いで応えた。

突然の出来事に戸惑う星川と秋子を横目に娘は撮影の準備を始めている。

その颯爽とした身のこなしにあの撮影のときの秋子がオーバーラップされた。

「そういえば、娘さんの名前聞いていませんでしたね」

「夏に季節の季って書いて、なつきです」

—夏季ちゃんか。ちょっと色黒で勝気なあたりが彼女にピッタリだな

「は～い、いくわよ。未来の新婚さん」

夏色のキューピッドはファインダー越しの二人に

ささやかな願いを込めてしっかりとシャッターを押した。

カシャッ！

白と黒のトライアングル

—そんなこともあるのね、世の中には

紀美子はパソコンの前でため息をついた。

ディスプレイには、古本にはさまれていた写真が

無事落とし主の元に帰ってきたというショートストーリーが映し出されている。

夫と高校生の娘を送り出した後は暇をもてあます、

何の刺激もない日々を送る専業主婦からすれば、まるでおとぎ話の世界だ。

まわりにはパート先で若い男と良い仲になったという主婦もいるらしいが、

そんなこと目当てで勤めに行き、刺激を求めようとは思わない。

紀美子は娘雪乃の部屋のドアを見つめた。

そして、もう一度、ため息をついた。

—ひとりの悩みは家族の悩みですぞ。迷える、乙女よ。

「ただいま。どう、雪乃は」

仕事から帰宅してきた寛之が尋ねると紀美子は首を横に振った。

「夕飯とお風呂とトイレ以外は部屋にこもりっきり」

「そうか、相変わらずだな」寛之は苦笑いした。

「彩香ちゃんの転校が辛いというのはわかるんだけど」

彩香ちゃんとは、雪乃の小学校からの幼馴染のことでいま同じ高校に通っている。

小さい頃から本当に姉妹のように仲が良く、

学校はもちろん、週末も共に行動をしている。

二人で肩を寄せ合うように歩く光景を見ては

「まるで恋人同士みたいね」と紀美子はよく雪乃を茶化していた。

そんな雪乃が「転校か—もう会えないよね」

と思ひ詰めた表情で学校から帰宅してきたのはつい先日のこと。

それを境に、雪乃は彩香のことはもちろん、

あいさつや必要なこと以外、口を閉ざし部屋にこもるようになった。

紀美子のため息もそれに比例して増えていったのだった。

結局、雪乃の引きこもりは春休み最後の日曜日になっても、ずっと続いていた。

平日は学校があったからまだいいものの、

春休み中はたまに「ちょっとコンビニに行ってくる」ぐらいで、

一日のほとんどを部屋で過ごしていた。

明日から新学期だというのに、明るくなるような気配はまったく見られない。

「雪乃、留守番頼むわね」

紀美子は以前から古マンガ好きの寛之にブックピープルに行こうと誘われていた。ブックピープルとは元雑誌編集者が経営する、本・マンガ・雑誌・写真集などクオリティーの高い中古品をリーズナブルな価格で販売するペーパーメディア・リサイクルショップ。エプロン姿が似合う口ひげのマスターの温厚な人柄と、出版の最先端で数々の本を見てきたプロがセレクトする商品のセンスが評判で、立ち読み派からマニアまで幅広い層のユーザーに親しまれている。寛之にいたってはオープンした時からの常連で、たまにレアな本が入荷されるとマスターがこっそりと教えてくれるほど鼻眞にしてもらっている。また、寛之の影響を受けた雪乃もブックピープルがお気に入り、時折、彩香と学校帰りなどに寄ることもあるらしい。ただ、紀美子だけはそこそこの利用客といったところだった。

—今はそんな気分じゃないんだけど、たまには息抜きも必要よね

午前十時の開店直後にも関わらずコンビニ半分ほどの店内にはすでに何人かの客が入っていた。寛之は目ざとく「懐かしいなこれ」と掘り出し物を見つけると、うれしそうにページをめくりながら一人の世界に入っていった。取り残された形になった紀美子は仕方なく小説コーナーに足を向けた。本棚に並ぶいくつもの本のタイトルを眺めていると、ある一冊の本が目にとまった。

—そういえば、この本

雪乃と彩香には共通の好きな作家がいて、新作が発表される度に二人で競い合うように読んでいたことがあった。出版されてまだ間もなく雪乃の部屋の本棚にも並んでいたのを紀美子は覚えていた。

—まさか、もう読んじゃって売ったとか

本を手に取りページをパラパラとめくると途中で何かはさまっていた。

—あら、写真だわ

写真はある学校の正門で撮られたと思われ、
二人の女子生徒が仲良く並んで立っている。
紀美子とはっさに手のひらを口にあてた。
そこに映っていたのは雪乃と彩香だった。
紀美子の脳裏を数日前に見たショートストーリーが映画の字幕のように流れていった――

他人に起きた偶然がまさか自分の身に起きようとは――
興奮冷めやらぬまま紀美子は本から写真を抜き取り、
寛之の腕を強引に引いて店から出ると、車の中でその顛末を聞かせた。
せっかくの楽しい時間を取り上げられた寛之はそれを聞いても少し投げやりだった。
「写真がはさまっていることはあっても、それが娘の写真とはなあ」
「でしょ。もう、びっくりして声を上げそうになったんだから」
「でも、どうして写真が本に？」
「もしかして今回の雪乃のこととなんか関係があったりして」
紀美子は写真をじっと見つめたまま
「こうなったら強行突破するしかないようね」
家に帰り雪乃の部屋のドアをノックしようとした紀美子に寛之が
「お手やわらかにな、まだ関係があると決まったわけじゃないからさ」
はあい、とドアを開けてのそっと顔を出した雪乃は、
写真を見るなり目を大きく見開いて
「え〜っ、それどうして持ってきちゃったのよ、お母さん」
「それって、あなた何か知ってるの」
「持ってきたってどういうことだ」寛之が追い討ちをかける。
「ああ、めんどくさいな、もう――実はね」

リビングに場所を移し臨時会議が始まった。
テーブルをはさんで親子が向かい合うように座り、その間には問題の写真が1枚。
持久戦を見越した紀美子が用意した三人の好きな飲み物が入った
湯呑み、マグカップ、ペットボトルもそれぞれの手前に置かれている。
まずは雪乃が写真の出どころを説明した。
「これは同じ `ミスクル、（ミステリーサークルの略）の貴志川君が撮ってくれたもの。
もちろん、彩香も同じ写真を持ってるよ」
ミスクルとは雪乃と彩香が所属している部活のことで、
放課後にそれぞれが持ち寄ったミステリーを読むのを目的とし、
それ以外にも創作活動やDVD鑑賞などもしている。
そのメンバーの一人貴志川にある日突然、告白されたという。

「二人のことが好きだって」

「二人って、あなたと彩香ちゃん？」

不思議がる紀美子に雪乃はコクリとうなずいた。

「貴志川君て、どんな感じの子なの」

紀美子は写真の出どころがわかって安堵したのか、

今度は貴志川のことを気になったらしい。

「別に見た目は悪くないし、どこにもいるような全然普通の子だよ」

雪乃の当たり障りない感想は紀美子の期待には添えなかった。

雪乃も彩香も初めての出来事にどう対応したらいいかわからなかった。

ただ、告白したからといって何か特別なことを求められたわけではなく

「とりあえず部活の友だちから」という貴志川の可笑しい提案に従い、

はじめはお茶や本屋巡りをしたり、いっしょに帰ったりしていた。

やがて、似たようなことを毎日繰り返しているうち、

告白直後の緊張感も次第に解かれ、3人の距離は縮まっていった。

例の写真はそんな頃、写真が好きな貴志川が「記念に」と二人をデジカメで撮り、

そのデータをプリントアウトして二人に渡したものだだった。

それが3人のこれからを左右する小道具になるとは誰も知る由もなかった。

その後、一週間ほどは良好な関係が続いたが、

次第に居心地の悪さを感じ始めたのが雪乃だった。

「だって、もし私が好きになっても100%にはならないわけでしょ」

「そういうことになるわね」紀美子がうなづく。

「彩香はこんなトライアングルも面白くない？ってのん気なこと言ってたけど」

寛之がここまでの経緯をまとめながら雪乃を諭した。

二人を一人占めしたい貴志川君。

100%好きになりたい雪乃。

今の関係を楽しみたい彩香ちゃん。

君たちの関係はちょっと複雑なトライアングルだったんだな

恋愛ビギナーの3人にはその瞬間を楽しむことはできても、

それぞれ自分の思いをコントロールしたり、

微妙な距離感を調整したりすることはできなかった。

それにストレスを感じた雪乃が白黒はっきりさせようと言い出したのも、

自然な成り行きといえた。

とはいえ「本心を語り合ってジメジメしちゃうと、なんか学校で顔が合わせ辛くなるし」

という雪乃の気持ちも分かるような気がした。

そんな時、追い打ちを掛けるように貴志川が第2の告白をした。

友だちでいられるのは春休みまで——

まわりくどい言い方だったが、要するに転校するということだった。

それを聞き雪乃はいっそう焦燥感を募らせた。

できることなら三人が納得できる形でこの関係に一区切りつきたい——

悩みに悩んだ末に雪乃は、二人にある方法で解決しようと提案した。

それは以前読んだミステリーからヒントを得た、

貴志川からもらった写真をカードに見立てたゲームだった。

TITLE 【白と黒のトライアングル】

① **select** ～選ぶ～

雪乃と綾香は最近読んだ本の中から1冊を選び、

アドレスを書いたカードをはさんでおく。

「カードとはこの写真のこと。

その方がゲームっぽいでしょ。

もちろん、私と彩香はおたがいが選んだ本を秘密にしておく。

でも、3人とも毎日のように顔を合わせてたから、

だれが何を読んでいたかはだいたい見当がついちゃうけどね」

② **entry** ～並べる～

それをブックピープルの小説コーナーの棚にこっそりとしのばせてくる。

「え、なんでまたブックピープルに」

それまでソファーに深く腰掛けていた寛之が体を起こした。

「あまり古本屋さんに行かないっていう貴志川君に薦めようと、

3人で初めて行った本屋さんなの。

それにあのマスターだったら、

このことを見つかっても許してくれるような気がしたから」

寛之は仕方ないなと言いつつもまんざらでもない表情をした。

③ **seach** ～探す～

貴志川は2冊の本を探し出し、どちらか1冊からカードを抜き取る。

開始は○月○日の午前十時、タイムリミットは2時間後の正午とする。

「貴志川君もどっちが何を読んでいたか覚えているはず。
カードを抜き取った後、そこに書いてあるアドレスを見て、
どうするかは貴志川君次第ということ」
寛之が腕を組み「貴志川君は本を見つけた後、究極の決断をせまられるわけだ」

④ judgment ～下す～

ゲームの結果は以下の3通りとする。

1. 雪乃にメールがある
2. 彩香にメールがある
3. どちらにもない

「要は私か彩香にメールがあるか、どちらにも無いか。
もちろん、そこにいくまでに何か不具合、
たとえば本が一冊しか置いてなかったとか、
カードにアドレスが書いてないとかといったことがあれば、
そこでゲームは不成立。ゲームの内容はざっとこんな感じ」

十七歳の娘が考えたゲームは無邪気とも大胆ともとれる内容だった。
何かを得るには、何かを失う。失いたくなければ、何かを犠牲にする—
まだまだ子供だと思っていた雪乃も
そんな大人のシーソーゲームを理解できる年頃になっていたとは—
最近の雪乃の様子を間近で見てきた紀美子は複雑な心境だった。

しばらく沈黙が続いた後、寛之が口を開いた。

「ところで、今、そのゲームは？」

「進行中のはずだったんだけど、ね」と紀美子に目を向けた。

「あ、そうか。ある人がまさかのリセットボタンを押しちゃいましたとき」

「ごめ～ん、雪乃。そんな大事なものなんて気がつかなかったから」

「でも、もういいの、お母さん」

「もういいって」寛之が訊いた。紀美子も雪乃を見つめる。

「え～、言うのもなんか口惜しいな。

まさかお母さんたちに話すなんて夢にも思わなかったから——」

雪乃は一呼吸おいてから続けた。

「じゃあ、まず一つ目の理由、貴志川君のことからね。

貴志川君ははじめから彩香だけに気があったんじゃないかなって思うの。

でも、ほら私と彩香はいつも一緒にいたから、

なかなかそれを伝えるようなきっかけがなくて」

「それで二人に告白したということか」寛之が頷いた。

「なんか雪乃がお邪魔虫みたいじゃない」紀美子がむっとした。

「でも、どうして彩香ちゃんの方に気があると思ったの？」

ほらこれ見て、と雪乃はテーブルの上の写真を手にとって紀美子に渡した。

「よく見ると、彩香はカメラ目線でしょ。私はどこか遠く見てるけど」

「あ、ほんとだ。でもこれがどう関係あるの。偶然じゃなくて」

「それ撮ってもらうときね、貴志川君がなかなかシャッターを押さなかったの。

歩いている人がじろじろこっちを見ていくし、もう早くしてって感じで。

だから私も彩香も少しイライラしていたの」

「わかるわかる。記念撮影ってなんか恥ずかしいんだよな」

「そしたら貴志川君が『二人ともちゃんとこっち見て』なんて言うの。

そんなこと言われると余計に見れなくなるじゃない。

結局、私は最後までカメラを見なかったんだけど、

後でもらった写真を見たら彩香の目線は違ってた。

そのとき気づいたの。

もしかしたら、貴志川君がシャッターを押さなかったのは

彩香が自分の方を向いてくれるのを待ってたからなのかなって」

寛之が貴志川の行為に同調するかのよう

「そういえば、まだ雪乃が小さい頃、写真を撮るのに苦労したなあ。

撮る側からすれば相手がちゃんとこっちを見てくれなければ、

なかなかシャッターは押せないものだよ。」

寛之は雪乃に少し遠慮気味に「ましてや好きな子だったらね」

紀美子はそんなものなの、と納得できない表情をした。

「ところで雪乃、さっき、一つ目って言ったよな。まだ何かあるのか」

「鋭いな、お父さん今日キレキレじゃん。

もう一つの理由はね、彩香のこと。あの子もそうだったんじゃないかって」

「じゃあ彩香ちゃんも貴志川君に気を寄せてたってこと」

紀美子が写真をテーブルの上に戻しながら訊いた。

雪乃が本をブックピープルに持ち込んだとき、

すでに彩香の本は本棚に置かれていた。

たしか、その本は数週間前に彩香が部活で読んでいた記憶があった。

雪乃はそれを見て彩香の気持ちを察した。

「3人でいろいろな本屋さんを廻っていて気づいたんだけど、

私と彩香なんかはすぐに新刊コーナーに飛びついたり、

『今、読まれてます』とか『これが店長のイチオシ』みたいなPOPに

惹かれて本を選んだりすることが多いのね。

でも、貴志川君はあまりそういうものには関心がないみたいで、
ちょっと変わった探し方をするの」

「ふ～ん」寛之が湯呑みをもって席を立った。

「ところで、お母さん、あまり思い出したくないかもしれないけど、
ブックピープルの小説コーナーの本ってどういう順に並んでた？」

「う～ん、作家のあいうえお順じゃなかったかな」

「そう。貴志川君は本屋に行くと、必ず『あ』行の作家からじっくり見て回るの。
じゃあもう一つ。

もしこのゲームに参加するとしたら、なんていう作家の本を選ぶ？」

「あんまり名前知らないけど—

でもなるべく『あ』行のそれも『あ』に近い作家にするわね」

「理由は」

「だって、その方が先に見つけられる確率が高くない？」

「その通り」

「たしかに貴志川君のその探し方だったら『か』行や『さ』行よりも
早く目に留まるだろうな」

お茶のお代わりを入れて戻ってきた寛之が念を押した。

「彩香もそれに気づいていて、その上で選んだ本だと思う。

このゲームは早さを競うものではないから、先に本を置いてくるとか、
どっちの本が先に見つけられるかなんてあまり意味がない。

でも、彩香はそれをメッセージとして本に託したと私は感じたの。

決して安易に選んだのではなくて—」

—私の本を先に見つけて—

つい最近まで「トライアングルも面白い」と言っていた彩香が
いつのまにか本気モードに入ろうとしていた。

その本を見た時、雪乃は少なからず驚きと寂しさを感じつつも、
その場で気持ちのスイッチを切り替えていた。

「それで彩香ちゃんは誰の本を選んだの」紀美子はつい先を急かした。

「アイカワケンジ」

寛之と紀美子は顔を見合わせた。

その時、リビングの掛け時計が正午を告げるメロディーを奏でた。

貴志川の選択、そしてゲームのタイムリミットだ。

全てを言い切って黙り込む雪乃に寛之がやさしく諭した。

「雪乃、君がはじめからゲームに乗り気ではなかった理由はよくわかる。
でも君はプロポーターだ。
ゲームの結末を見届ける義務があるんじゃないかな」
「うん、わかってる」

貴志川が撮った写真。
彩香の選んだ本。
雪乃はその意味を深く感じとっていた。
だからこそ、ちゃんと伝えあうべき—

家をあわてて飛び出して行った雪乃の後姿を見届けた紀美子は、
久しぶりに安堵のため息をついた。
「結局、雪乃の引きこもりの原因は彩香ちゃんの転校じゃなくて、
意外や意外、恋愛問題だったのね—
子供が成長していくたびに、
親がしてあげられることって確実に減っていくでしょ。
それが嬉しくもあり、寂しくもあり」
「いいんじゃない、それで。
みんな、そうして大人になっていくんだから」
寛之も同じ気持ちだった。
「どう、納得できた？、写真のミステリー」
「分かったような、分からないようになってとこかな」
「よし、じゃあ思い違いがあるといけないから、
いちおうおさらいだけしておこうか」
寛之は紀美子の向かいのソファに座り直し、写真を手にした。
「僕ははじめこれを見た時、
あの子が写真を葉代わりにすることなんてあるのかなと思った」
「それは私も同感。写真に映っているのは雪乃と綾香ちゃんだけど、
本は違うんじゃないかなって思った」
「ところが、問題は葉にしていたかどうかではなく、
これを撮った貴志川君が二人に告白をしていて、
ある時まで3人でトライアングルなるものを楽しんでいたということだった」
「そこからややこしくなったのよ」
「写真を見た雪乃は貴志川君が告白したかったのは彩香ちゃんだったと確信した。
そうと分かった以上、早くトライアングルを解消して然るべき方向に進んだ方がいい。
ただ、話し合いで済むことではないし、
自然消滅では後味の悪さが残ることもある。」

まして貴志川君は転校するのであまり時間がない。

それならば公平にゲームではっきりと決着をつけようということになった」

「じゃあ、雪乃が100%好きになれないっていったのは」

「ゲームを始める口実だったか、少しはその気があったか」

紀美子はうんうんと反芻しながら聞いている。

「ところが、雪乃が考案したゲームは一見、

最後に貴志川君の二者択一で終わるような設定だったけど、それは全くのフェイク。

なぜなら、わざとカードをはさんでいない本を置き、

ゲームを不成立にすることが雪乃の本当の狙いだったから。

そうなれば、当然次はない。

そうしてトライアングルを解消できるというシナリオだったんじゃないかな」

「じゃあ、雪乃ははじめからゲームを成立させるつもりはなかったってこと。

どうしてわかるの」

「これだよ」寛之は写真(カード)の裏側を紀美子に見せた。

「うん、雪乃のアドレスでしょ。でもちょっと」

「あの子、字がきれいだったよな」

「小さい頃からうるさく言ってきたもん」

「そんな雪乃が書いたにしてはあまりにも雑すぎる。

まして、選んでほしいという気持ちが少しでもあれば、

もっと丁寧に書かないか。ラブレターとまでいかないまでも」

「いわれてみれば、走り書きに近いわね」

「雪乃は本を置きに行ったとき、

彩香ちゃんを選んだ本を見て彼女の気持ちを知ってしまった。

そのままカードがはさまれていない本を置いたのではゲームが不成立になり、

彩香ちゃんの想いは無駄になる。

そこで急遽、カードにアドレスを書き込み本にはさんだ。

おそらくカードはいつも持ち歩いてたんだろう。

トライアングル解消からペア成立へ——

当初の狙いとは変わってしまったが、

彩香ちゃんが貴志川君の選択を受け容れるのであれば、

それで良しとしよう。ところが」

紀美子が耳をふさぐポーズをした。

「事態は二転三転。

今度は君がカードを引き取ってしまい、ゲームは再び不成立に。

そしてタイムリミット——

結局、雪乃はゲームの使命を果たせるどころか、

僕らから真相をせまられ、仕方なく全てを語るはめになったと——

どう、こんなところで」

紀美子はうなづいた「うん、だいたい合ってると思う」

「さて、貴志川君はどうするのかなあ。

タイムリミットの時点でカードが2枚揃っていないのでゲームは不成立。

でも、言い換えればゲームは終了しているから、

もうルールに縛られることはない。

まして目の前には彩香ちゃんのアドレスが書かれたカードがある。

そこにいるのは自分だけだからルール違反をしようと思えばできる。

貴志川君はゲームでの選択はできなかったけど、

ここで初めて本心から究極の選択をすることになるだろうね」

「でも、それだけは思いたくないなあ、雪乃のためにも」

紀美子はリビングの時計を振り返り

遅くなったけどお昼にしようか、とキッチンに向かった。

「パスタでいいでしょ。『蟹とチンゲン菜のクリームソースあえ』と

『とろーり卵のカルボナーラ』とどっちがいい」

「おいおい、そんな凝ったもの今からできるのか」

「ご心配なく。2回ほどチーンとするだけですから」

なるほどと苦笑いすると寛之はテーブルの上の写真を再び手に取った。

「まさか、この写真が青春ドラマの小道具だったとはねえ」

背中越しに紀美子がくすっと笑った。

「ねえ、どうしてそんなに雪乃のことがわかるの」

「君の娘だからだよ」

窓の外ではサクラの花びらがちらほら舞い始めている。

「ちょっと空気を入れ替えようか」と寛之が戸を開けると、

リビングのカーテンを揺らしながら、春の柔らかい風が過ぎていった。

その頃、雪乃は彩香とおよそ1週間ぶりの再会を目指して、

自転車のペダルをフル回転させていた。

待ち合わせのファストフードショップに駆け込むと、

彩香が水と氷だけになったドリンクの容器を手でもてあそんでいた。

「ごめん、ごめん。元気だった、彩香」

「おそいよ、もう15分も遅れてるよ」

「ちょっと、臨時会議があつてね」

「何それ。まいった。いよいよだね。あのね雪乃、確認しておきたいんだけど」

「このゲームのいかなる結末にだれも責任を負わない、でしょ」

「そう」

「それは3人で確認してるじゃない」

—やっぱり、彩香は本気なんだ。

—私がそれに気づいてること、分かってるのかな。

—気が重いなあ、ゲームはもう不成立になっちゃったんだし。

—正直に言うべきかな、あのゲームはカムフラージュだったって。

—でも傷つくだろうな。

—いや、隠しごとは二人の間ではご法度だ。

—う〜ん、う〜ん

「ちょっと、ちょっと雪乃。

さっきから何ぶつぶつ言ってんの。

言いたいことがあるなら、はっきり言いなよ。

あ、おなか空いてんの」

—この期に及んで——よし、わかった

「あのね、彩香、実はね—」

そのとき、彩香のスマホが鳴った。

みるみるうちに彩香の頬が紅潮し、目が爛々と輝き始めた。

—だめだ、こりゃ。もう手遅れだ。完全に恋する乙女の顔だ

しかし、ものの10秒も経たないうちにその輝きは泣き顔に変わっていった。

「どうして貴志川君じゃなくて、

ブックピープルのおじさんからメールが来るわけ」

大切な本と写真をお預かりしています。

お手すきの時にでもお立ち寄りください。

お待ちしております。

ブックピープル 店主

予定外のメールが彩香に送信されたことで

雪乃がゲームの不成立を告げるまでもなく

トライアングルは事実上、解消された。

雪乃は彩香には悪いと思いつつも、貴志川に少しだけ感謝した。

彩香は明日から新学期だというのに生まれて初めての失恋を経験した。

寛之と紀美子は電子レンジでチンしたパスタを食べ終えようとしていた。

そのとき1本の電話があった。

「もしもし、ブックピープルです。

いつも、お世話になっております。

あ、寛さん、今朝はどうかされたんですか。
見かけたと思ったら、急に姿が見えなくなったんで、
それで心配してお電話したんです。
ああ、急用だったんですね。
ところで今、お時間よろしいですか。

実はちょっとミステリアスな出来事がありましてね。
15分ほど前、高校生らしき男の子が小説を見ていたんです。
寛さんもご存知の通り小説コーナーはレジの正面にあるので
何を手にしているのかだいたいわかります。
はじめ男の子は一仮にK君とします—
K君は同時に2冊の本を手にとって見比べていました。
一冊はアイカワケンジの『合鍵のない部屋』、
もう一冊は渡瀬響子の『ハロー、ロンリー』でした。
はじめにアイカワケンジの本をぱらぱらとめくりながら、
そこに何かはさんであるのを確かめたような仕草をしました。
次に渡瀬響子の本も同じようにそうしたのですが、
あれっという表情をしたんです。
あるべきはずのものが無い—というような
それからK君は2冊の本を丁寧に元にあったところに戻すと
レジに近寄りポケットからデジカメを取り出して
記念に店の外観を1枚撮っていいかと訊くんです。
快諾するとありがとうございますと微笑んで店を後にしました。
とらえどころのない好青年というか、何とも不思議な男の子でしたね。

問題はその2冊の本です。
まだ出て間もない人気作家の本なんですけど仕入れた記憶がないんです。
売るわけにもいかないものでどうしたものかと思案してましたら、
アイカワケンジの本から写真を見つけたんです。
なぜか裏にアドレスが書いてあったので、
とりあえずメールでご連絡差し上げました。
でも、もう一冊の渡瀬響子の本は何の手がかりもありません。
最後のページに丸いしみのようなものがあつたぐらいで。
えっ、『ハロー、ロンリー』を引き取る？ああ、取りおきですか。
それか、寛さんさえよろしければ、お譲りしますよ。
拾得物で届けるといってもいけませんしね。
そういえばお嬢さん、ミステリー大好きでしたよね。

この本、女子高生を描いた青春ものなんでピッタリですよ。
それにしても、こういうことがあるんですね、世の中には。
すいません、長々と。それでは、また」

店主は電話を切るとカウンターの上にある2冊の本を眺めた。
あまりに真剣に見ていたので、思わず苦笑いがこぼれてきた。

—やっぱり雪乃ちゃんの本だったか
—もう一冊も友だちに渡してもらおう

客足が遠のき、しばし静寂が訪れる昼下がりに。
そのひとときはブックピープルのブレイクタイムとなる。
店主は店外の木陰にお気に入りのディレクターズチェアを運び出し、
読みかけのミステリーを膝上にのせ静かに腰をおろした。
傍らには自宅から持参したサンドウィッチとポットに入れたコーヒー。
ランチの準備が整い、さっそく本のページを開くと、
そこに悪戯な1枚のサクラの花びらが舞い降りてきた。

※このストーリーは作者の実体験をモチーフにしました。

ミジカナハナシ

<http://p.booklog.jp/book/28094>

著者 : HALTO

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/owari1110/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28094>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28094>